

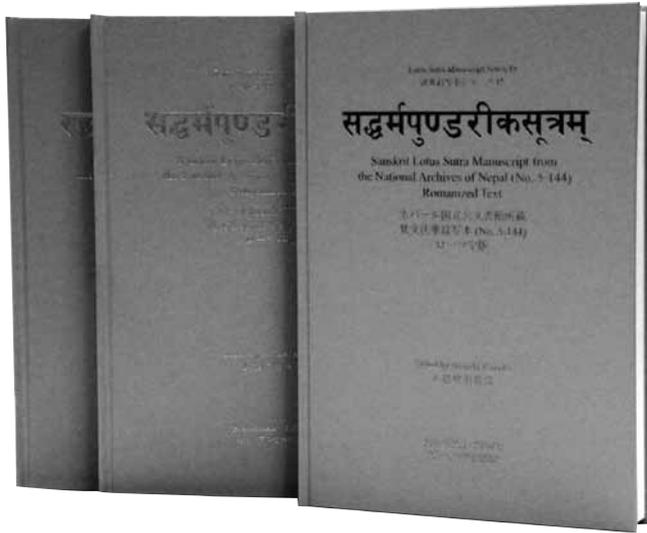
ギルギット・ネパール系 梵文法華經写本の一考察

小槻晴明

※東洋哲学研究所は、1997年以来、創価学会とともに、「法華經写本シリーズ」の刊行を推進してきた。これは、各国の研究機関の所蔵する法華經写本を鮮明なカラー写真で撮影した「写真版」と、写本の読み、をローマ字化した「ローマ字版」を公刊するもので、法華經を中心とした初期大乘仏教の研究に資するための事業である。また、梵文法華經の校訂本としては、これまで「ケルン・南條本」(1908-12年)、「荻原・土田本」(1934-35年)、「ダット本」(1953年)などの先駆的業績があったが、今日の学問的水準から見ると、より正確で信頼に足る校訂本が望まれている。当シリーズは、そのための基礎資料を提供することも目的としている。今春、刊行された、シリーズ17冊目となる『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本 (No.5-144) ——ローマ字版』は、そのための大きな前進となるものであり、編著者にその概説を依頼した。

本年3月28日に上梓された『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本 (No.5-144) [略号N3]¹⁾ ——ローマ字版』は、筆者の6冊目のローマ字版である²⁾。それまでの5冊のローマ字版と大きく異なる特色は、梵文法華經のテキストを多変数関数に見立て、それを構成する個々の写本テキストを変数と見なしたことである³⁾。

すなわち、N3写本のテキストを定数、Ga、Gb、Gc、Gkの4種のギルギット系写本のテキストと、B、C3、C4、C5、C6、K、L1、L2、L3、N1、N2、Pe、T2、T6、T7の15種のネパール系貝葉写本のテキストを変数とみなし、定数と各変数とがどの程度一致するかを、サンプルとして選択したキーワードを分析して整理し、そのデータを多変数解析し、頻度表を作成し、横棒グラフで可視化したことである。



『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本（No.5-144）[略号N3] ——ローマ字版』

1. ネパール系写本全体を展望したテキストの分類作業

それまでの5冊のローマ字版（紙写本4種、貝葉写本1種）の出版は、或る一つのネパール系写本テキストのローマ字化を実現すると同時に、そのキーワードを整理して他の写本テキストとの共通点を探し出し、それらの傾向性から、ネパール系写本全体（貝葉写本13種と紙写本15種）を展望し、ネパール系写本をいくつかのグループに分類することであった。

それら5冊のローマ字版の特色と出版の意義は、それぞれ以下の通りである。

（1）東京大学総合図書館所蔵 梵文法華經写本ローマ字版（略号T8）

筆者が、徳島大学教授・戸田宏文（1936-2003）の指導下で紙写本T8を読んでいた2000年頃は、この写本がどのグループに属するか、明確ではなかった。この写本は、1903年に河口慧海（1866-1945）がカトマンズで入手し、南條文雄（1849-1927）が「ケルン・南條本（KN）」の校合に用いた写本の一つである。端正なランジャーナ文字で丁寧に書写され、誤写の少ない、資料的に価値の高

(4)

い写本で、読み進めていくうちに、貝葉写本N3を忠実に写した写本であることがわかった。これは、フランスのビュルヌフ（1801-1852）が1852年に上梓した、世界初の近代語の訳である、法華経のフランス語版の底本に用いられた紙写本P3の原本であることが明らかになった。これで、(N3、T8、P3)という一つのグループの存在も確認された。このローマ字版は2003年に出版された。

(2) 英国・アイルランド王立アジア協会所蔵 梵文法華経写本ローマ字版
(略号R)

2冊目は紙写本Rのローマ字版で、2007年に出版された。これは、1908年から1912年にかけてサントペテルブルクで出版された梵文法華経の校訂本、いわゆる「ケレン・南條本」の底本に用いられた写本である。このことから、Rは紙写本の中で最も重要視されるべき基礎資料であることが分かる。その奥書から、Rが書写されたのは、ネパール暦923年（1801/1802年）であることが分かっている。T4の書写年はネパール暦927年（1805/1806年）、T5とT9の書写年は、奥書にその記述が無いので不明だが、RやT4の前後2-3年の間隔をあけて書写されたと推定される。Rは、T4、T5、T9とともに、戸田宏文がR系と呼んだ紙写本のグループを形成する。これで、紙写本独自の読みを伝えるR系（R、T4、T5、T9）というグループの存在が確認された。

(3) パリ・アジア協会所蔵 梵文法華経写本ローマ字版（略号P3）

3冊目は紙写本P3のローマ字版で2008年に出版された。ビュルヌフという「歴史的人物」は、ヨーロッパに1837年末までに将来された多数の写本に含まれていた、法華経写本のP3を底本として、チベット語訳のみを参照しながら、そのフランス語訳を完成させる（1839年）という偉業を成し遂げた。このテキストのローマ字化は、フランス語訳の底本を検証するという観点から、どうしても見過ごすことのできない行程であり、2003年8月25日に逝去した戸田宏文の強い意向でもあった。(1)で述べたごとく、P3は、T8の姉妹写本であるが、T8、P3、R系以外の他の紙写本の由来を明確にするという、もう一つの重要な目的が、このローマ字版にはあった。これにより、ネパール系紙写本15種の系統、すなわち貝葉写本との関連が明確になった。それに伴い、貝葉写本

間のグループ分けもより一層、見通しのきくものとなった。

（4）ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華經写本ローマ字版（略号C5）

2010年には、貝葉写本C5のローマ字版が上梓された。C5写本のローマ字化作業の過程で、2009年2月に東洋哲学研究所から筆者に贈呈された、L1、L2、L3のネパール系貝葉写本のローマ字版テキストをも参照し得たことは幸運であった。これらは、蔣忠新中国社会科学院アジア太平洋研究所員（教授）（1942-2002）の研究成果である。以後、筆者はギルギット系写本4種とネパール系貝葉写本16種、紙写本15種を参照することになり、現時点でのギルギット・ネパール系梵文テキストのほとんどを参照して可能な限り、グループ分けの作業を進めることができるようになった。このことで、紙写本に関しては、ネパール系貝葉写本との関連をほぼ解明することができた。貝葉写本に関しては、戸田宏文がB系と称したグループに属する写本の全体像を完全に明らかにするまでには至らなかったが、かなりの範囲まで絞り込むことができた。なお、B系という呼称の元となったB写本のローマ字版は、2011年に水船教義（東洋哲学研究所委嘱研究員）によって上梓された。その他、C3、C4、C6、K、N2、N3、Pe、T2、T6、T7については、さらに検証する必要があるという課題が残った。

（5）コルカタ・アジア協会所蔵 梵文法華經写本ローマ字版（略号A1）

以上の課題を残しながら、筆者は紙写本A1のローマ字版を2014年に上梓した。この写本を選んだのには一つの理由があった。ギルギット系写本は7世紀末頃、ネパール系貝葉写本は11-12世紀頃、ネパール系紙写本は17-20世紀頃の書写と推定される。紙写本の最盛期は18-19世紀で、その嚆矢となるA1の書写年は、ネパール暦800年（1679/1680年）、すなわち、17世紀後半である。貝葉写本のテキストの流れが、どのようにA1に流れ込み、後の紙写本群にどのように受容されているのかを探ることが必要であった。筆者は、ここに至ってようやく、B系をはじめとする貝葉写本の大まかな流れをつかむことができた。それと同時に、次の段階として、C3、C4についてのさらなる検証の必要性を強く感じた。

2. 『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本 (No.5-144)』 について

(1) から (5) までの出版を振り返り、筆者にはある種のもどかしさがあった。それは、これまでと同じように、個々の写本のローマ字版を発刊し続けても、「ケルン・南條本 (KN)」に代わるべき校訂本の発刊という遙かな山頂に到達することは困難であるという自覚であった。これまでの出版で明らかになった、ネパール系写本群の全容解明は確かに大きな成果ではあったが、それをどのように分かりやすく表現すればよいのかという、表現上の課題を解決する必要性もあった。

例えば、それまでのローマ字版の序で、「X写本とY写本の読みが一致する」とか「読みが合わない」と表現しても、それは、これら二つのテキストの或る一定の範囲についての記述に過ぎず、長大なテキスト全体の視野から、写本XとYの特徴を表現していることにはならない。限られた範囲のサンプルだけで写本を分類していけば、かえって正しい軌道から大きく逸れてしまう危険もある。ネパール系貝葉写本16種をいくつかのグループに分類する場合も、部分と全体という二つの観点から考えなければならない。これは、グラフを章別に表示することで対処できると考えた。

また、「テキストの読みが一致する」とは、どのようなことなのか、ということも明確ではない。主観的・抽象的な表現を排し、客観的・数値等による具体的基準を設定する必要がある。これには、各テキストから選択されたサンプルの語形や語句の一致と不一致、誤読、誤写、遺漏などを勘案して算出された頻度表を基に判定するのが適当と考える。一応の目安として、一致する頻度が50%を超えれば、互いの写本は「ほぼ一致する」、40%未満であれば「一致しない」、70%以上であれば「一致する」と表現できる。ただ、ギルギット系写本のように、サンプル数が極端に少ない場合に、頻度のみに頼ってこのような判定を下すことは危険である。

次に重要な課題は、ギルギット系写本とネパール系写本との関連を、ネパール系貝葉写本と紙写本との場合のように、具体的に明らかにしていく必要がある。現在の状況では、ギルギット系写本の資料としての不十分さが、この作業

を遂行していく障害となっている。それでも、ある程度の見通しをたてることは可能であると考えている。

ネパール系貝葉写本から紙本に至る約5世紀（11-12世紀頃から17-20世紀頃）の間の伝承過程の現象と、ギルギット写本からネパール系貝葉写本に至る約4世紀（7世紀末から11-12世紀頃）の間の伝承過程の現象が類似しているのではないかという仮説を立て、分類作業を進めてみることも、ギルギット・ネパールの地域性と時代的な差異を勘案するとしても、一概に無謀な冒険と一蹴することもできないであろう。ともあれ、これらの試みは、今後の研究課題であると思う。

以上の展望の下で筆者は、とりあえずネパール系写本を土台に据えた仮称「ギルギット・ネパール系梵文法華経校訂本」の編纂を目指すこととしたい。最後に、蛇足ではあるが、この校訂本と中央アジア系テキストとの校合作業が、より広範な規模で行われていくことを願っている。

（文中の敬称は略させていただきました。）

注

- 1) 各写本の略号はAbbreviationsを参照。そのうち「Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series（法華経写本シリーズ）」の概要については、『東洋学術研究』第54巻第1号（通算174号／2015年）で紹介しており、東洋哲学研究所ホームページの論文BOXでも閲覧できる。http://www.totetu.org/assets/media/paper/t174_227.pdf
- 2) 「写本のローマ字化とは何か」については、東洋哲学研究所ホームページ「法華経写本」コーナーの「コラム」に、筆者が「人類の希望の経典——法華経の写本刊行」と題して執筆している。
http://www.totetu.org/lotus-sutra/e_03_1/e_03_3.html
- 3) 本稿に述べた「2. 『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華経写本（No.5-144）』について」を参照。

Abbreviations (略号一覧)

Saddharmapuṇḍarikāsūtra Manuscripts (梵文法華經写本)

A1: *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the Asiatic Society, Kolkata (No. 4079), Romanized Text*, Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 14, Tokyo 2014.

『コルカタ・アジア協会所蔵 梵文法華經写本 (No. 4079) ローマ字版』

B (B in KN): *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the British Library (Or. 2204), Facsimile Edition*, Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 9, Tokyo 2009.

『大英図書館所蔵 梵文法華經写本 (Or. 2204) 写真版』

B (B in KN): *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the British Library (Or. 2204), Romanized Text*, Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 11, Tokyo 2011.

『大英図書館所蔵 梵文法華經写本 (Or. 2204) ローマ字版』

C3: Add. 1682, *Sanskrit Lotus Sutra Manuscripts from Cambridge University Library (Add. 1682 and Add. 1683), Facsimile Edition*, Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 4, Tokyo 2002.

『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華經写本 (Add. 1682 および Add. 1683) 写真版』

C4 (Ca in KN): Add. 1683, *Sanskrit Lotus Sutra Manuscripts from Cambridge University Library (Add. 1682 and Add. 1683), Facsimile Edition*, Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 4, Tokyo 2002.

『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華經写本 (Add. 1682 および Add. 1683) 写真版』

C5 (Cb in KN): *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from Cambridge University Library (Add. 1684), Romanized Text*, Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 10, Tokyo 2010.

『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華經写本 (Add. 1684) ローマ字版』

C6: Add. 2197, Cambridge University Library, Cambridge.

Ga: Group A, *Gilgit Lotus Sutra Manuscripts from the National Archives of India, Facsimile Edition*, Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 12, Tokyo 2012.

『インド国立公文書館所蔵 ギルギット法華經写本 写真版』

Gb: Group B, *Gilgit Lotus Sutra Manuscripts from the National Archives of India, Facsimile Edition*, Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 12, Tokyo 2012.

『インド国立公文書館所蔵 ギルギット法華經写本 写真版』

Gc: Group C, *Gilgit Lotus Sutra Manuscripts from the National Archives of India, Facsimile Edition*, Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 12, Tokyo 2012.

『インド国立公文書館所蔵 ギルギット法華經写本 写真版』

Gk: *A New Fragmentary Gilgit Manuscript of The Saddharmapuṇḍarikāsūtra*, Tokyo 1982.

K: Kawaguchi's ms., Toyo Bunko, Tokyo.

KN: *Saddharmapuṇḍarīka*, Bibliotheca Buddhica, 10, St. Petersburg 1908-1912.

L1: *Palm-leaf Manuscript of the Sanskrit Saddharmapuṇḍarikāsūtram Kept in the Potala Pala-*

- ce in Tibet, A Romanized Text III 1*, Beijing 2006.
- L2: *Palm-leaf Manuscript of the Sanskrit Saddharmapundarikasūtram Collected in the Norbuli-
ngga in Tibet Written in A.D. 1065, A Romanized Text III 2*, Beijing 2006.
- L3: *Palm-leaf Manuscript of the Sanskrit Saddharmapundarikasūtram Collected in the Norbuli-
ngga in Tibet Written in A.D. 1067, A Romanized Text III 3*, Beijing 2006.
- N1: *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the National Archives of Nepal (No. 4-21), Facsimile
Edition*, Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 2-1, Tokyo 1998.
『ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華經写本 (No. 4-21) 写真版』
- N2: No.3-678, National Archives of Nepal, Kathmandu.
- N3: *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the National Archives of Nepal (No.5-144), Romani-
zed Text*. Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 15, Tokyo 2017.
『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本 (No.5-144) ローマ字版』
- P3: *Manuscrit sanscrit du Sūtra du Lotus de la Société asiatique (N° 2), Texte Romanisé*,
Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 8, Tokyo 2008.
『パリ・アジア協会所蔵 梵文法華經写本 (No.2) ローマ字版』
- Pe: No. 0004, Library of the Cultural Palace of the Nationalities, Beijing.
- R (A in KN): *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the Royal Asiatic Society of Great Britain
and Ireland (No.6), Romanized Text*, Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 7, Tokyo
2007.
『英国・アイルランド王立アジア協会所蔵 梵文法華經写本 (No.6) ローマ字版』
- T2: No. 408, University of Tokyo General Library, Tokyo.
- T4: No. 410, University of Tokyo General Library, Tokyo.
- T5: No. 411, University of Tokyo General Library, Tokyo.
- T6: No. 412, University of Tokyo General Library, Tokyo.
- T7: No. 413, University of Tokyo General Library, Tokyo.
- T8 (K in KN): *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from University of Tokyo General Library (No.
414), Romanized Text*, Sanskrit Lotus Sutra Manuscript Series 5, Tokyo, 2003.
『東京大学総合図書館所蔵 梵文法華經写本 (No.414) ローマ字版』
- T9: No. 415, University of Tokyo General Library, Tokyo.

(こつき はるあき／東洋哲学研究所委嘱研究員)